C－52 衣服にほどこされたアイヌ紋様とその色彩について（第3報）

東京家政大家政　○荒井純子　無所属　荒井修子

目的　アイヌ民族の衣服にほどこされている紋様は彼等特有のもので、他の民族衣裳には見られないものである。私共は前報までに土俗品として保存されている資料の紋様を分析して、先づ元になるアイウシ文、モレウ文の二種より、これを軸として変化させた23種の基本型の分類を行い、更に技法的分類によつてわけられた資料を、共通な紋様の表現で分類し、紋様がどのような状態で使用されているか、紋様の傾向、紋様のある位置について報告したが、今回は更に紋様を構成する要素として考えられる、地布、当布及び刺繍糸について分類し、これ等によつてかもし出される彼等特有の色彩について解明したいと思う。

方法　衣服に現はれた色彩は、主として当布のとり合せにより、現はされ、白　赤　黒が主な色となつているが、彼等が交易によつて得た古い布をたくみにとり入れることによつて、またと得がたい逸品が製作されている。資料に表現されている色彩は長い年月着用された後、保存されたものであるため、変褪色はひどく　これを現在の色表によつて表示することは出来ないが、汚れと共に残つている色相をたよりに、往時はどんなに美しかつたことだろうと想像することは出来る。

結果　彼等の衣服の紋様は魔除け、お祭りの意味が強いということは、第一報で述べたが紋様の構成ばかりでなく、色に対しても、赤は焔を意味する魔除けであり、黄は神の色とされているなど、その使用にもいろいろな意味のあつたことがわかる。彼等の云う「赤」とは赤っぽいもの、であり、「黒」とは黒っぽいものを云つたらしい。